

『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（貞享二年分）

入口 敦志、江口 文恵、近藤 弘子、田草川みずき
深澤 希望、柳瀬 千穂、竹本 幹夫

本稿は、金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫所蔵の、前田綱紀（初名綱利・天和三年末に改名。本稿では綱紀で統一表記）の小姓であった葛巻昌興の、延宝・元禄期にわたる私的な役務日記の中から、貞享二年度分を対象として、能楽記事を中心とする学芸等に関わる記事を抜き出し、解説したものである。同時代の演能記事は幕府・諸藩ともまれであり、また松雲公綱紀時代の加賀の学芸形成期の実態を伝える記事にも富んでおり、旁その資料性は高い。二一世紀COE事業・グローバルCOE事業以来継続してきた加賀藩研究会の年次成果の一部として、『葛巻昌興日記』を『演劇映像研究2008』『演劇映像研究2010』『演劇研究』37・38に連載して来た。掲載をご許可頂いた金沢市立玉川図書館近世史料館に深甚の謝意を表する。

【凡例】

一、本文の掲出にあたっては、極力原文の姿を生かすことに努めたが、読みやすさの便を考え、句読点・濁点を施し、漢字は原則的に新字体に改めた。

（貞享二年分）

一、助詞の小書や欠字札の空格などは原文のままとした。後者については、原文に欠字札が取られていない部分も散見する。それらはそのままにしたため、本文表記上やや不統一が生じた部分がある。

一、本文中、割り注の部分は極力その通りとし、葛巻昌興本人により補入されたと思われる脚注的な小字注記は「」で括り、示した。

一、各記事の掲出に当たっては、【】で掲出記事の年月を小見出しとして掲げ、その次に本文、さらに解説の順で記述した。

一、本稿執筆にあたっては、入口・竹本の指導の下で右四名と竹本が翻刻・解説を担当し、さらに入口・竹本がこれを校閲して内容の統一を図った。

【貞享二年正月二日】

二日 天晴
辰后刻、大書院 江 御出座。御先立、津田玄蕃。御腰物、生駒右

近役之。

昨日、石川・河北・三之丸当番之物頭六人御礼。所謂神尾兵衛・村上助右衛門・吉田左門茂知・茨木伝右衛門・岡田喜六郎・青木新兵衛也。鳥目官足宛也。次御馬廻十組五組濟而先鳥目引之御礼。

畢而黒書院之方より被為入也。此時御通懸ニ於黒書院、御手猿樂一同奉拜。又於寄付之間入口、檢校〔盲目〕兩人奉拜也。

今夜御謡初也。依之六半頃大書院御出座。御熨斗目御半上下也。如御嘉例、本多安房・前田佐渡・前田備後・長九郎左衛門・横山左衛門、於、御前御吸物被下之。右順々ニ御盃被下之。此面々何茂返上也。次、横山筑後・前田備前・津田玄蕃・前田与十郎・奥村兵部、并公事場奉行松平玄蕃・玉井勘解由・多賀与一右衛門、取次番永原宇右衛門等、暨組頭・物頭之内、如例御流被下之。此時御肴之役、前田佐渡・横山左衛門也。但左衛門儀、今夜初而所被仰付候也。奥村伊与忌中ニ付、御肴之役之儀、如何可有御座旨、今昼佐渡方より被得御内意処、左衛門可相勤旨被仰出云々。

御囃子三番

弓八幡

東北

乱

御盃并御流之内、右三番并小謡々之。畢而大夫竹田平四郎江時服被下之。御目錄佐渡授之云々。

国元での正月の日記。昨日つまり元日に、綱紀が物頭らに謁見し退出する途中で、手猿樂（抱え役者）および檢校の挨拶を受けたこ

とを記す。加賀藩では複数の盲人檢校及び勾当・座頭を扶持したが、そのすべてが音曲に携ったわけではなく、宝永六年には藤沢勾当以外には平家の達者はいなかった由（『温故集録』2・158頁）。貞享三年の時点で竹森檢校・成都（本記貞享三年七月一日条）、須田檢校・湯浅檢校・山沢檢校などの名が知られる（前掲書161頁）。『政隣記』貞享二年五月七日条に「座頭了仙」が勾当に列せられるという記事も見える。つづく恒例の謡初の記事は、盃事の次第など、他年より比較的簡単に記され、囃子については曲名のみ記す。天和三年『演劇研究』三十七号（二〇一四年）に翻刻掲載を例にとると（弓八幡・東北・猩々切）という演目にシテと囃子方の名前がすべて付され、〈猩々切〉は竹田平四郎が舞い、「前二番ハ仕舞ハ無之」つまり居囃子であった旨も記されている。本年の囃子三番の詳細は不明ながら、慣例に照らすと〈弓八幡・東北〉の居囃子と猩々〈乱〉の舞囃子が奏された可能性が高いだろう。「式がすむころに、大夫が猩々を舞い納め」（『加賀藩の能楽』）という進行を考えると、〈乱〉が舞われた本年は、〈猩々切〉が舞われた年に比べて盃事の所要時間が長かったか。

【貞享二年二月六日条】

六日 天晴。今日御恭様、表江御出。御婚禮之御道具御見物也。小書院江被筋置之。九時過、表江御出也。御見物相濟、被為入候時分、御囃子五番被仰付。御簾ハ御居間書院也。役者之者ハ常々表御小姓勤番之所也。御囃子ハ八時過初ル。同半過相濟。

平四郎

老松

市十郎

湯谷

平四郎

西行桜

市十郎

玉葛

左平次

祝言

来十日、御慰之御能可被 仰付旨、且又其砌、御使番以上之輩、

常ニ御城相詰申面々、役儀有之人持等并組頭物頭、并御使番以

上之せがれ、見物可被 仰付旨被 仰出。

御恭様は綱紀の養女で、実父は七日市藩主・前田利意。他の姫君

と比べて能見物の記事が多く、能好きであったらしいことが、本稿

でも度々指摘されている。

この日、恭姫は小書院に飾られた自らの婚礼道具を確認後、囃子

五番を見物した。シテを勤めたのはいずれも加賀藩の御手役者で、

京都在住の竹田平四郎と、金沢在住の諸橋市十郎・波吉左平次。

また、同月十日に恭姫御慰能が催されること、当日の見物人につ

いての指示も記録されている。

【貞享二年二月十日条】

十日 天陰。今日御慰之御能、於舞台 被仰付也。五時已前、

御表^江 御出也。御右之方、老中、備後・九郎左衛門・左衛門・

本多主殿、并筑後・備前・与十郎。且又玄蕃・兵部、内一人宛、

且又、新左衛門其外人持之内、役儀有之面々<sup>公事奉行
奏者番等也</sup>、諸組頭・

諸物頭等群居。御左之方、御縁通八矢織部、并幼少之奥御小

姓、并裁許之面々、暨永原治兵衛・塩川安左衛門等同公。壮年

之奥御小姓ハ御右之方伺公之内也。但右近・平次郎、并予、御

腰物役として一人宛、御後之方ニ伺公、若闕如之時ハ八矢織部

内取合可相勤旨所被 仰出也。

御恭様於小書院御見物也。

御能組

市十郎

皇帝 友之進

平四郎

朝長

平四郎

二人静 勘右衛門

御中入

市十郎

杜若

同人

放下僧 友之進

平四郎

藤渡 甚助

是ハ御好也

左平次

現在鶴 万右衛門

老武者

平四郎

乱

与平次

孫兵衛 長左衛門
二郎兵衛 金七

今日御能、七時已前相済也。惣様常之小袖ニ麻上下着之。

御恭様御慰能の記録。午前八時前から準備が始まり、能八番・狂言一番が演じられた。午後四時前に終了。前項に引き続き、シテは御手役者の竹田平四郎・諸橋市十郎・波吉左平次が勤めた。

ワキは、高安友之進、春藤勘右衛門、竹中甚助、春藤万右衛門、坂本与平次的面々。ただし「友之進」は、高安ではなく能瀬友之進である可能性も否定できない【貞享元年九月十九日】条参照。『演劇研究』第38号。なお、終曲の〈乱〉のみ囃子方の名が記されている。笛・杉長左衛門（森田）、小鼓・糟合次郎兵衛（幸）、大鼓・石井孫兵衛（石井）、太鼓・小寺金七（観世）。

能八番のうち〈藤渡〉の曲名左注には、恭姫の所望であることを示す「御好也」との注記がある。本稿に既出の恭姫の御好能は、他に〈安宅〉〈熊坂〉〈乱〉〈海士〉の四曲。〈海士〉は【貞享元年十一月二十七日】条（『演劇研究』第38号）、その他三曲は【天和二年十一月四日】条（『演劇研究』第37号）に記録されており、これらの曲目から、恭姫の嗜好が見て取れるとの指摘もある。

さらに、【延宝九年九月十六日】（『演劇映像学2011』第四集）条、浅野紀伊守室・満姫を招いての饗応能の記事では、満姫と、保科正経室・久萬姫が、それぞれ〈阿漕〉と〈橋弁慶〉を所望してい

る。いずれも、この時代の武家社会における、女性の能受容のあり方の一片を示す興味深い事例である。

この記事から約一か月後の貞享二年（一六八五）三月十六日、恭姫は前田家家臣の長時連（後に尚連。元禄十六年（一七〇三）四十二歳没）に嫁す。その恭姫が、宝永四年（一七〇七）十二月三日に病没した際は、金沢での普請・鳴物が七日間遠慮された（『政隣記』）。

【貞享二年三月十四日】

十四日 天晴。

今夕斎藤中務を以 御恭様江 御書物式十部被進之也。此内住吉物語・文正と被遣也。 源氏物語・廿一代集・清少納言枕草子等、其外哥合之類也。此内、大半御宿紙・御箱等之儀、去歳より予奉り申渡所也。

〔御馬廻〕大音三四郎儀、於御鷹場之内放鷹之科ニよて閉門之被 仰付云々。兄又八郎好里遠慮被 仰付云々。

婚礼を控えた養女恭姫に書物二十部を進上した記事。

大名の娘が興入れの際、婚礼道具に『源氏物語』等の古典作品の書物が含まれることが常となっている。本文を書家に書かせるだけでなく、表紙の絵、料紙等装丁にも趣向をこらし、納める箱も時絵等を施した豪華なものが用意される。婚礼道具として仕立てられた書物のことを嫁入り本とも言う。葛巻は前年の貞享元年（天和四年）から、恭姫の婚礼道具となる書物の紙や箱について、任されていたことがわかる。進上した書物の内訳は、以前すでに進上していた『住吉物語』『文正草子』のほかに、『源氏物語』、二十一代集、『枕草子』および歌合などである。恭姫は分家の七日市藩主前田利意の

娘だが、綱紀の養女となった。能好きであつたようで、本日記では金沢城での演能の際に、決まってその名が見える。翌々日の三月十六日、家臣の長時連に嫁いだ。長家は古くから前田家に仕えている家で、八家と称される重臣の家柄の一つである。

【貞享二年三月十八日】

十八日。朝間小雨降。四時過已後快晴。

〔一昨日御婚禮首尾好相濟候御賀詞二人持以下御使番以上登城。〕今朝石野五兵衛を以 御姫様 江五百八十餅并三種二荷被進之。

時連より家臣長伊左衛門を以五百八十餅献上之。伊左衛門へ時服二被下之。

已下刻 御姫様御登 城。時連茂追付登 城云々。九半時御居

間書院 御出座^{御熨斗目}。時連 御目見。献上物、綿百把^{台ニ載}

御小將長袴ニ、次御太刀目録不破彦三披露之。時連退出。次家臣、

加藤紋兵衛・長伊左衛門・堀内又兵衛・小林六右衛門・高柳馬

左衛門御目見。鳥目百疋宛献上之。尤奏者番披露之。畢而時連

又 御前へ参出。家臣 御目見之御礼申上之。此時有 御会釈

而直ニ御右之方着座^{御闕ニ相隔}。御三献出。御前ニハ御三方、

時連ハ足打也。

御土器被下之、二献加有て御腰物^{当麻、御脇指^{信国}代} 被下之。

但前田佐渡孝貞持参之、時連ニ授之。拝戴して 右土器 御前

江被 召上、御銚子入御三献等引之。畢而 御会釈有て御起座。

於是時連相伴として前田備前貞親・中川八郎右衛門入道意半参

出、時連より引下りて着座。本多安房・前田佐渡・奥村壹岐等

挨拶ニ罷出、御料理出ル^{本具足打、二汁七菜}。

御盃台出、 御出座。時連へ初之様ニとの御意有之。時連拝伏、

土器取候時ニ竹田平四郎松高キの小謡謡之。〔御意有て、〕安房

へ肴を参加有之時ニ小謡終ル。時ニ緩りと御酒被下候様ニとの

御意有て、御起座。右土器安房へ遣、其より段々及盃酒。此

間ニ御囃子三番。

高砂

東北

猩々

御饗応畢而時連等御勝手^江退出。其後又 御出座。時連家臣五

人^江御道具被下之。佐渡・壹岐授之云々。

加藤 紋兵衛

長 伊左衛門

堀内 又兵衛

小林六右衛門

高柳馬左衛門

右畢而、時連為御礼又 御前^江罷出、披露有て退出。此時、

於大広間前ノ白洲御馬拝領之式有之。先唐門より御馬〔号棚倉。

去夏御拝領御馬也。鹿毛。〕白洲へ引入之、御馬奉行野々村忠

右衛門ひかせ罷出。但御馬役高桑五兵衛相從之時、奥^{（空白四字分）}

時連ニ申述、時連御縁へ出、物陰ニて袴のす高く取、階下^江

下ル時ニ、高桑手綱を取て渡之。時連手綱を取て拝戴候而又渡

之。階へ上り老中^江御礼之儀述之而退出。老中^{（空白二字）} 刃迄送之。

今日奏者番并進物披露之表御小將、且又御三献配膳之輩、熨斗

目・常ノ長袴。其餘者、熨斗目・常ノ半上下着之。

今朝御姫様御迎ニ斎藤中務・斎藤長兵衛被遣之。則候御供。御帰、七半比。此時も又右両人御送ニ被遣也。御往来共見物貴賤成群云々。

今日時連家臣五人於使者之間御料理被下也。時連退出、半時斗有て為御礼登城云々。御姫様より為御礼水野次郎右衛門被進之。

二日前の三月十六日に婚礼を済ませた恭姫と長時連が金沢城に挨拶に訪れ、宴が催された記事。夫婦が登城し、献上物の披露と挨拶の後、盃事の際、小謡が謡われる。謡った竹田平四郎は京都在住の金春流能役者竹田権兵衛広富で、加賀藩のお抱え役者である。「松高き」の小謡は〈弓八幡〉の上ゲ歌。その後肴が出され、饗応の宴となつてからは、囃子が三番催された。〈高砂・東北・狸々〉といずれもめでたい席にふさわしい演目である。饗応終了後には時連に馬が送られた。なお日記中に別紙が添付され、時連やその家臣への引出物の内容と代金が列記される。

恭姫の輿入れを見届けた綱紀は三月下旬に金沢を発ち、参勤交代のため江戸へ向かい、四月上旬には江戸に入府する。この年の江戸滞在中に、綱紀の能楽への関わりにとって、ターニングポイントとなる出来事が起こる。

【貞享二年四月九日】

九日 天快晴、昼過風烈。六半前、御登城^{御長袴}。御城内御供、野村与三兵衛・藤田平兵衛并予勤之。今日御目見之式粗記之。

於御座間、紀伊中納言様御暇。次ニ加賀守様御目見。御献上物、御太刀一腰、白銀五百枚、御拾五十也。御懇之上意有

之旨。右畢而公方様黒書院^江出御、松平長門守殿・同若狭守殿・有馬中務太輔殿・京極甲斐守殿等、参府之御目見。是等之儀相済、(今日被召連)奥村兵部御目見、御手綱廿筋、銀馬代献上之。前田佐渡儀、未忌中ニ付、兵部一人也。五半比、御城御退出。直ニ御老中方并牧野備後殿へ被成御座、其より御上屋敷へ被為入。安芸守様・大助様・大蔵大輔様初、御出衆大勢有之。八時、御中屋敷御帰館也。御姫様^江御土産之品々被進之。八降布卅疋、御絵鑑一帖^{狩野伯圖之}、白鳥一。此外、御拾二、御帶三筋、台人形一、被進之。

今日公方様二之丸御成、桂昌院様并姫君様之御袋様ニも被為入、御能有之由、依之御内所之御使不被上之。お須戸の御方、尾上殿へ御状被遣之。奥村兵部儀、為御礼、御老中方、其外へ罷越也。今日、飛騨守様御着府、則御屋敷ニも御出被遊云々。

三月二十六日に金沢を出発し、翌月六日に江戸中屋敷に参着。八日に奉書が到来し、本日登城した。参着の御目見を済ませ、午後二時ごろ中屋敷へ帰館した。節姫への金沢土産として、八降布・狩野伯圖筆の絵鑑・白鳥・拾・帯・台人形が贈られた。「八降布」は越中・加賀産の麻布の一種の「八講布」と思われる。この日、江戸城二ノ丸では、綱吉の御成があり、桂昌院(三代將軍家光の側室。綱吉の生母)と瑞春院(鶴姫の生母)とともに能見物のため、奥への使者は遠慮して奥女中に書状を送るにとどめた。『常憲院殿御実紀』を参照すると「九日臨時朝会あり。今朝紀伊卿に阿部豊後守正武御使し就封の暇給ふ。中納言光貞卿まうのぼり辞見せらる。鷹馬を給ふ。家司も同じ。松平加賀守綱紀はじめ。参観拝謁する者十四人。

目付須田市兵衛盛輔は京より帰謁す。今日もまた慶事により。二丸にて散楽あり。御台所。姫君の御生母に見せしめたまふ。曲は玉井。土蜘蛛。湯谷。葵上。祝言。狂言一番。せんじもの。二人大名なり。『徳川実紀 第五篇』『柳宮日次記』も同内容とあり、御台所鷹司信子と瑞春院が見物したとする。綱紀の参観拝謁と演じられた曲目についても記されている。

【貞享二年四月三十日】

晦日 朝間小雨洒、南風烈、昼以後属晴、風休止。

鶴姫君様 江昨日御使之御礼、以御使者被 仰遣。此御使者は姫君様衆、右衛門佐殿、瀧野殿へ有御音物。今日、記録一冊御出被成。此記ニ富士茄子之御茶入、秀吉公より 利家様御拝領之事有之候。兵部・新左衛門拝見可仕之。且又、槌成記之間、御道具由来帳ニも可書載置之旨、被 仰出也。記録之趣、慶長二年十一月十三日、内府公へ文梨小壺、加賀亜相利家へ富士茄子茶入賜之。台子ニ可然之由、被 仰出之旨也。尤記録具ニ依不致拝見、只其趣斗也。

二十九日に鶴姫へ参府の進物をし、その御礼の使者が到来したので、更に答便を送った。また、秀吉より利家が拝領した富士茄子の茶入について記された記録が見つかり、奥村兵部と多賀新左衛門に一見の上、道具由来帳にこの旨を明記するようお達しがあったことを示す記事。記録には慶長二年十一月十三日に家康へ文梨小壺、利家へ富士茄子茶入が下賜されたとあり、綱紀が台子点前に相応しいとの意向を示した旨を聞き及んだと記す。富士茄子茶入は、前田育徳会蔵の重要文化財の茄子茶入（銘富士）である。

【貞享二年五月十五日条】

十五日 天陰 六半時過御登城。直ニ御上屋敷へ 被成御座、八時已前、御帰館。去十二日於ニ御丸御能有之由。御能組

難波	宇川助大夫	平岡信濃守	徳永 弥平	湯川喜右衛門
田村	牧野美乃守	中山周防守	御牧甚五兵衛	三宅権左衛門
芭蕉	長浜源八	松野喜兵衛	森 半丞	鈴木善兵衛
御舟弁慶		平岡信乃守	松井源左衛門	永 久
鉢木	長浜源八	平岡信濃守	御牧甚五兵衛	永 久
海士	牧野美乃守	中山周防守	徳永 弥平	湯川喜右衛門
御邯鄲	同人		徳永 弥平	湯川喜右衛門
車僧	斎藤飛驒守	松野喜兵衛	森 半丞	湯川喜右衛門
春日龍神	宇川助大夫	同人	松井源左衛門	湯川喜右衛門
御乱	平岡信乃守		野村善左衛門	永 久
			森 半丞	湯川喜右衛門
			松永忠大夫	小笹 庄兵衛

右過而西刻 還御云々。今日御老中・若年寄衆・牧野備後守殿・御側衆・御留守居衆・大目付衆・御留守居番衆・御目付衆、並延寿院・林春常・知足院・松平隼人正殿・柳生對馬守殿・曾我周防守殿、拝見被仰付云々。

今朝御出之刻、於薦之間御通懸ニ小瀬順理御目見。有賀甚六郎披露之。

今日 御城内御供野村与三兵衛・永井伝七郎并村宗次郎一実也。江戸城二ノ丸における將軍主催の能の伝聞記事と小瀬順理(医家三代甫庵。君命で木下順庵に師事し漢学を究めた。元禄五年三十七歳没)御目見の記事。『徳川実紀』によれば、二ノ丸御能は十一日の由で、「宿老・少老・留守居・大目付・目付・并に柳生對馬守宗在・寄合曾我周防守助興・松平隼人正忠冬見ることをゆるされ、饗膳をたまふ。樂は難波・車僧・春日龍神は鶴川助大夫某、田村は牧野備後守成貞、海人は牧野美濃守成時、芭蕉は長浜源八郎祐長、船弁慶・邯鄲・猩々は御所作なり」とある。『柳宮日記記』では「鶴川」は「宇多川」、典順も若干相違する。

【貞享二年六月十一日】

十一日 天陰。昼急雨、又属晴。 九時、松平日向守殿江為御賀詞御越被成。

今日、木下順庵御招、易講談御聞可被成旨、先日より相究候処、右御他出之故歟、御延引也。(下略)

松平日向守は、松平信之のこと。前日の十日、雁間詰から老中となり、綱紀はその祝いのため外出することになり、予定されていた木下順庵(貞幹)による易経の講義は延期されることになった。十

月二十一日に振り替えられたことが、当該日の記事により分かる。

【貞享二年六月十三日】

十三日 天晴。今朝、戸田山城守殿江可被成御座旨之処、於二丸御能有之、山城守殿早天より御登城候条、御延引可被成旨、昨日御家来より聞番中迄申来ニ付、無御出。(下略)

戸田山城守は、老中、戸田忠昌のこと。綱紀は忠昌を訪問するため外出する予定であったが、彼が江戸城二ノ丸での催能に呼ばれたため中止となった。『徳川実紀』には、この催能について「十三日二丸にならせられ猿樂あり。諸老臣并に芙蓉間伺公の輩はじめ。柳生對馬守宗在。儒臣林春常信篤まで見るをゆるされ。医官今大路延寿院親俊并に知足院隆光もこれにあづかる。」と記されている。

【貞享二年六月十六・十七・十九日】

十六日 天晴。 御登城 御長上下 (御城御供、藤田平兵衛・平

岡五左衛門・中村三郎左衛門也)。四半前御帰館。今日四時過、仙溪院様被為入。御迎ニ八津田伊織被遣之。今夕仙溪院様御花塙江御出被遊、亥刻比迄月御覽之由。

十七日 天晴。明後十九日、仙溪院様御馳走之御能可被 仰付旨也。春藤六郎次郎・今春三郎右衛門参上。御能組相窺、左之七番相極也。

宝生数馬 同 同將監 数馬 將監
水室 経 政 定 家 良 三輪

將監 祝言
柏崎 数馬
今夕又、仙溪院様御花塙江御出被遊也。

(十八日条は関係記事が無いため略)

十九日 天陰。昼以後快晴。 五半過御能初。御簾ヲ表御居間ニ被垂。仙溪院様御見物所也。 中將様ニハ於桐之間御見物也。舞台ハ御料理之間。樂屋ハ小書院、同ニ之間等也。保生数馬ハ將監ニ男也。今日初而被 召寄也。

御能組

宝生数馬
氷室 春藤六郎次郎

大 今春三助 太観世 左吉
小 幸 清六 笛 長命吉右衛門

入間川

鷺仁右衛門

同人
經政 山本与平次

加藤 市丞 長命吉右衛門
加藤惣大夫

しどうほうがく

同人

保生將監
定家 春藤六郎次郎

葛野 一郎兵衛 森田庄兵衛
保生新九郎(元号観世)

御中人

数馬
張良 六郎次郎

加藤勘左衛門 諸井 源兵衛
加藤 惣大夫 長命吉右衛門

將監
三輪 山本与平次

今春三郎右衛門 長命吉右衛門
幸 清六

清水

鷺仁右衛門

同人
柏崎 春藤六郎次郎

葛野 一郎兵衛 森田庄兵衛
保生 新九郎

数馬
弓八幡 山本与平次

今春三郎右衛門 諸井 源兵衛
加藤 惣大夫 長命吉右衛門

御中入之内、奥御料理之間より御膳出ル。福正院殿御相伴也。
〔右御振廻之事、永井伝七郎・稲垣三郎兵衛并御膳奉行兩人奉行也。〕
今日御中屋敷ニ罷有諸士ハ見物被 仰付也。且又惣様麻上下着之。御能ハ過相済。

宝生父子が一貫してシテを勤める、綱紀による宝生愛顧の嚆矢とも言える演能記録。加賀藩邸では延宝九年八月、將軍宣下祝儀能が催されているが、この時は他流のシテも出演している。「將監」は当年八月に亡くなる四世重友に代り家督を継ぐ九郎友春、この日初めて召し寄せられた「数馬」は、早世する政之丞と思われる。

仙溪院(久万。前田利常九女。天和元年に亡くなった会津藩主、保科正経室)のための私的な、また舞台ではなく御料理之間などを用いたお慰み能ながら、重厚な内容の催しである。演能が計画されると、まずワキ方春藤六郎次郎と大鼓方金春三郎右衛門が参上し、要望を窺った上で番組と配役が決められており、兩人は調整役の合力役者か。自ら出演もしているのは珍しい。

《定家》他の小鼓を勤める保生新九郎には「元号観世」と注記が付されている。天和三年に宝生大夫相手の《道成寺》を断り追放、貞享元年の恩赦で召し返されるが、宝生座付を命じられ姓も改めた新九郎重豊のことである。

【貞享二年六月二十三日】

廿三日 雨降。昼以後快晴。 伝通院江為御名代前田佐渡参詣。今日、前田宮内殿より御使者を以故右近大夫殿御遺物被進贈之。古今和歌集一部也(二案為遠・津守寿曉両筆)。御恭様へも新

古今一部（飛鳥井雅經卿筆之由）御進上候也。

「前田宮内殿」は、七日市藩三代、前田利広。「故右近大夫殿」は前田利家の孫の、七日市藩二代利意（ともよ）で、当年四月に亡くなっており、形見として本が届けられる。『古今和歌集』一部の筆者として注記されている二条為遠は二条為定の子で『新後拾遺和歌集』の選者。津守寿暁は『新後撰和歌集』初出の歌人。古筆切の伝承筆者としても知られるが、津守氏であろうこと以外、詳しいことは分かっていない人物で、該当するような『古今集』写本は尊経閣文庫には伝わっていない。『新古今』一部を贈られた「御恭様」は当年三月に藩士の長九郎左衛門時連に嫁いだ、綱紀の養女、恭姫。飛鳥井雅経は『新古今和歌集』の撰者の一人であり筆者として信じ難いが、善本ではあったか。

【貞享二年八月八日条】

八日。天晴。四時比上野御参詣。其より御上屋敷江被為入。御長袴ヲ裏付御袴ニ被召替、追付御帰館云々。予御上屋敷江予参。明日田中一閑神代巻講談之事被仰付置候処、明日モ御指延被遊之条、十一日可罷出旨被仰出。有賀甚六郎方より申達之云々。翌日の八月九日、儒学者田中一閑を呼んで書紀の神代巻を講義させることになっていたが、延期になったことを記した記事。九日の代わりに同月十一日に行うことと相成った。詳しくは十一日条を参看されたい。

【貞享二年八月十一日】

十一日 午後雨降。表御居間御出座。田中一閑 神代巻講談
題号。奥村兵部・多賀新左衛門等其外聴聞被仰付云々。（兵

部・新左衛門ハ二之間候。其外有合候頭中、且又、当番之輩等、少々於桐間聴聞之云々。講畢而、一閑御次へ退出。重而兵部・新左衛門誘引ニ而被召出之。御手自御熨斗鮑被下之。是日本紀、初度講談御祝被成候旨云々。

田中一閑による『日本書紀』講義の記事。田中宗得（一閑）は加賀藩に仕えた神道家で、幕府神道方である吉川惟足の弟子。綱紀とともに家臣らも講義を聴聞し、神代巻が題字のみ講じられたとある。『日本書紀』の講談は今回が初めてのことと、講談のち再び一閑を召し出し、綱紀みずから熨斗鮑を下賜している。『政鄰記』にも「一、八月十一日、田中一閑宗得持金十扶江神代巻講釈被聞召より当番領分其外御近習之面々望之者ハ、罷出可承旨被仰出。九月廿一日も同事」とある。

【貞享二年九月二十一日】

廿一日 天陰。午后刻、於表御居間、田中一閑、神代巻講談被仰付。一閑儀、即候御闕而向見台而談之初一段。公被召麻之御上下也。前田佐渡・奥村兵部・多賀新左衛門、并野村与三兵衛（重徳、今年改之）・平岡五左衛門・津田伊織等、有合候頭分之輩、於同二之間聴聞。且当番之諸士等於桐之間聴聞之。予同候。八月十一日に引き続き、田中一閑による『日本書紀』の講義。八月の講義の時よりも、陪聴する藩士の名が多く記されている。『加賀藩史料』には、八月については『参議公年表』と『政隣記』から記事が収録されているが、この九月の講義については言及が無い。

【貞享二年九月二十九日】

廿九日 小雨降。昼以後晴。

今夜、招丹直清、而論語公治長・雍也之兩篇習之。去六月六日、大初而習之。頃日論語学而・為政、八佾・里仁、兩篇宛習之。丹直清は、木下順庵の弟子で、寛文十二年より加賀藩に仕える室鳩巢のこと。丹は直清の号か。「公治長・雍也」の兩篇を習い、それに先立ち、六月六日、『大学』を初めて習ったとのことだが、本日記の当該日には「天晴」と天候のことだけが記されている。

【貞享二年九月三十日】

廿日 紀伊守様 江 以和田小右衛門、兩種被進之。（是来五日、於御城御大名方之御能可有 上覽旨被 仰出。紀伊守様も御勤之由ニ付、御見舞旁被遣御様子也）。

綱吉が諸大名に命じた十月五日の大規模な能の催しを前に、シテを勤める姻戚の浅野光晟に対して御見舞の使者を送っている記事。五日は延期となり、九日に催された。

【貞享二年十月一日】

一日 天陰。如例御登城、其より御老中方へ被成御座。其より松平越中守殿 江 被成御座。其より御上屋敷へ被為入。午後御帰館。

今日於御上屋鋪前田佐渡・奥村兵部召之、被 仰聞ハ、今日御目見已前、牧野備後守殿、其外御老中を以、来五日大名衆へ御能被 仰付候間、御見物候様ニ被 仰出。其上 御目見之時分、右之義、御直ニ 上意有之、思召不被為寄御仕合也。此旨頭共へも可申聞旨被 仰出。兩人即奉賀之、退出云々。右上意之御礼ニ御城より直ニ御老中方へ被成御座云々。

江戸城での能見物を仰せつけられた記事。月始め恒例の江戸城登

城の日、綱紀は登城後老中を訪ね、さらに桑名藩主の松平越中守定重を訪問した後、上屋敷へ寄り、午後には中屋敷へ帰館した。立ち寄るところが多かったのには理由がある。十月五日に江戸城で予定している大名衆の能を見物するように仰せつけられたのである。將軍御目見の前に、側用人の牧野備後守成貞や老中の面々から伝えられていたが、御目見の際、將軍直々に上意としてあらためて命ぜられた。綱紀の江戸城での能見物は何度も先例があるが、將軍直々の上意は珍しい。能好きの將軍徳川綱吉らしい。思ってもみない光栄ということで、綱紀は江戸城から老中たちの屋敷を直接訪問し、御礼を述べている。その後訪問した松平越中守定重は、妻が綱紀の祖父前田利常の娘松姫で、親戚筋にあたる。御礼や挨拶がたがた当日への準備等について情報を得たのであろう。本郷の上屋敷では家臣の前田佐渡孝貞と奥村兵部惠輝を呼び、この件について伝えており、前田と奥村は祝いの言葉を述べている。

翌日の二日条でも、綱紀は広島藩二代藩主浅野紀伊守光晟と宇和島藩主伊達遠江守宗利の屋敷を訪れており、これも当日へ向けての情報収集をしていたと考えられる。特に浅野光晟の正室は前田利常の娘満姫で、綱紀の叔母にあたり、前田家と浅野家は親戚関係にある。ちなみに貞享二年時の広島藩の藩主浅野綱長は、参勤交代で広島に在国中である。また、光晟は当日能を演じる大名の一人であることが、前出の九月三十日条に見える。子細を相談していたのである。

【貞享二年十月三日】

三日 天陰。御能相延六日ニ成候由御城坊主衆より申来。

五日に予定していた江戸城での能が翌日の六日に延期になったことが知らされた。理由は恐らく悪天候であろう。詳細は次条参看。

【貞享二年十月五日】

五日 終日雨降。夜ニ入風雨烈。今朝廣徳寺江為御名代前田佐渡参詣。御能又相延之由、夜ニ入有其沙汰。

前条で十月六日に延期され江戸城での大名衆の能が、さらに延期となった記事。本日記の当該条を見ると、十月四日条は「終日雨降」、五日は翻刻の通り、六日条にも「雨降、五半頃より雨晴」とあり、四日から六日にかけて、雨天のため、催能が不可能であったことがわかる。

【貞享二年十月七日】

七日 天快晴風無。昨夜山城守殿 聞番御招之御能ハ九日ニ被仰付由被仰渡之由也。今昼加藤遠江守殿御見舞。於大書院 御対面也。(今夜又招直清、述而・泰伯ノ二篇習之。)

雨天のため延期となった江戸城での大名衆による能の日時が決まったという記事。三日間降り続いた雨は六日の夜に上がり、能は二日後の十月九日に決定した。末尾には直清を招いて論語の講義を聞いた記事がある。直清は九月二十九日条に見える。後年幕府儒官に転身した儒学者室鳩巢の諱で、加賀藩藩士。この日は九月二十九日の続きで、第七述而篇、第八泰伯篇の二篇を読む。

【貞享二年十月九日】

九日 天快晴風無。今日於二之丸御能有之付、今晚寅后刻為御登城(常御小袖御上下也)、御発興未明ニ付、戸田山城守殿へ御寄被遊、御玄閑ニて被仰置之由。其より肥後守様へ被為

入。暫御滯座。則肥後守様御同道ニて二之丸へ御登城云々。西中刻御帰館。従裏御式台被為入。御乗興之戸多賀新左衛門、御先立奥村兵部也。前田佐渡御式台掛板ニ祇候之処、今日は天氣も宜、御機嫌能、首尾能御能相済候由、被仰出。則日出度御儀之旨、佐渡及御請也。直ニ奥御居間へ被為入、暫有テ多賀新左衛門被召之。今日御能之事等御難談被遊也。

今日御能ニ付、松御重一組御献上也。是山城守殿御指図云々。但御肴ハ不及被添由。依之御重斗也。此御重恰好之事、先日数被加御吟味也。凡長壹尺九寸、幅壹尺四寸四分歟。高壹尺八寸三分斗也。葵之御丸、四方ト上ト以上五ヶ所ニ、紺青ニ緑青、金泥を加テ画之。内ハ五重也。上重ハ御煮肴、四重ハ御むし菓子也(御菓子ハ主水方より上之)。御目錄ハ大高檀紙一枚。進上御一組以上。御名御実名被記之也。

今朝二之丸銅御門迄被成御座、御目付衆江御玄閑迄被召連御供之員御尋被遊処、侍兩人可被召連旨御指図。依之、藤田平兵衛・井上三大夫御供ニ罷越処、三人共ニ可被召連旨、重而御指図之由ニて、平岡五左衛門も御跡より馳参之由。此時未ほのぐらき程の由也(下乗之橋之迎迄御提灯被用之由)。公方様六半過御成。五時分御能初之由。先御能已前、甲府様、尾張中納言様、紀伊中將様、水戸宰相様・同少將様、中將様、御目見之由。勿論 中將様、御三人様方於御同席御見物也。且又緩々御見物可被成旨、牧野備後守殿を以被仰出云々。御中人之時分、是又於御同席御饗応。御老中・備後守殿御挨拶ニ御出之由。御土器出、備後守殿 上意を被伝言。緩々御酒被給候様ニ御意云々。

及薄暮御能相濟。又 御目見畢而一同御退出。御老中御色代迄御送之由。

御能組

中川佐渡守 高 砂	金森左京 幸 清	葛野九郎次郎 六	春日市右衛門 三九郎
池田丹波守 頼 政	権 七	今春三郎右衛門 権九郎	忠 次郎
松平左京大夫 東 北	春藤源七 保生新	松平長門守 新九郎	森田庄兵衛
松平讃岐守 自然居士	細川若狭守 葛野新	九郎次郎 新右衛門	六郎左衛門
松平紀伊守 野々宮	高安彦太郎 三 太郎	長右衛門 織田信乃守	
牧野駿河守 舟弁慶	金森左京 新右衛門	助右衛門 新右衛門	觀世左六郎左衛門 吉
松平備前守 百 萬	源 七	葛野九郎次郎 権九郎	森田庄兵衛 又次郎
有馬左衛門佐 葛 城	新 丞	今春三郎右衛門 幸 清	三九郎 忠次郎
安藤対馬守 班 女	権 七	葛野一郎兵衛 黒田甲斐守	春日市右衛門
南部信乃守 三井寺	新 丞	保生三太郎 新九郎	森田庄兵衛

(中人前より煩出、九郎次郎替)

南部遠江守 彦太郎 今春三郎右衛門 又次郎
海 士 権九郎 六郎左衛門
田村右京亮 源七 葛野市郎兵衛 觀世左 吉
三 輪 幸 清 六 春日市右衛門
乱 是ハ南部信乃守殿へ 御所望被 遊旨被 仰出。其御仕
度候へ共、及暮故、只謡斗有之由。
右御大名方、御中入之時、御目見有之由。
松平長門守殿・黒田甲斐守殿・織田信乃守殿へハ、一昨日以御
奉書被 仰付由也。凡今日御勤之内、中川佐渡守殿・南部信濃
守殿・細川若狭守殿、御芸振勝之由。就中若狭守殿宣云々。
今日御能之時分、御仕手之後見、保生九郎ト今春八郎勤之由。
間ヲ語ハ大蔵□□・鷺仁右衛門等之由也。
今日之閑暇、尤不堪惜。天快晴而風静也。仍贈短書於丹直清令
誘引之。往克明旅第、聞松風。直清作詩賦、予蜂腰一首述之。
江戸城二の丸での大名衆御能披露の記事。綱紀には十月一日条に
將軍綱吉から直々に見物するよう上意があった。夜明け前に藩邸を
出発し、途中老中戸田山城守忠昌や保科肥後守正容のところへ立ち
寄り、正容を同道しての登城となった。綱紀の正室は保科正之の娘
摩須(すでに他界)で、綱紀と正容は義兄弟にあたる。
戸田山城守の指図に従い、能興行の祝儀として、葵の丸紋入りの
檜重一組(五重)を献上した。中身は煮魚と蒸し菓子で、肴は添え
られない。寸法まで日記に記されている点から、規格が細かく決め
られていたのであろう。

能は五つ時(午前八時)から始まり、中人の饗応を挿んで、薄暮

の頃に終了した。綱紀は見物・饗応の際いずれも御三家の面々と同席であった。前田家が御三家と同格の扱いを受けるのはこの頃からである。

『徳川実紀』『柳宮日次紀』ともに曲名と大名衆の名前のみを記しており、玄人能役者の名は記されていない。『葛巻昌興日記』は役者名が完備されたより詳しい番組を記している。まずは大名衆から解説する。〈高砂〉のシテ中川佐渡守久恒は豊後岡藩主、〈頼政〉シテ池田丹後輝録は備中生坂藩主。〈東北〉のシテ松平左京大夫頼純は伊予西条藩主で紀州藩の分家筋、〈自然居士〉のシテ松平讃岐守頼常は高松藩主で水戸藩の分家筋にあたる。〈野々宮〉シテを勤めたのは前出の松平紀伊守こと浅野光晟、〈舟弁慶〉のシテ牧野駿河忠辰は長岡藩主、〈百萬〉のシテ松平備前守正信は玉縄藩主、〈葛城〉のシテ有馬左衛門佐清純は延岡藩主、〈班女〉のシテ安藤対馬守重博は備中松山藩主、〈三井寺〉のシテ南部信濃守行信は盛岡藩世子、〈海士〉のシテ南部遠江守直政は八戸藩主。〈三輪〉のシテに「田村右京亮」とあるがこれは田村右京大夫の誤りで、伊達家の家臣で一関藩主の田村宗永（建顕）のことである。鈴木正人編『能楽史年表 近世編上巻』所引『伊達治家記録』によると、十月十五日に田村建顕主君の伊達綱村は田村に能を命じられた御礼として干鰯一箱を幕府に献上している。〈高砂・舟弁慶〉のワキを勤めた金森左京は飛騨高山藩分家の金森近供、〈自然居士〉のワキ細川若狭守利重は熊本新田藩主。囃子方は〈野々宮〉の笛の織田信濃守秀一は柳本藩主、〈班女〉の小鼓黒田甲斐守長重は秋月藩主、〈東北〉の大鼓松平長門守は毛利吉就で長州藩主である。囃子を勤めた三人の大

名には前々日に奉書が到来し、この役を仰せつかった。

玄人の能役者は四座の役者が中心である。ワキの権七と新丞は宝生姓で宝生座付、春藤源七は金春座付、高安彦太郎は金剛座付。笛の春日市右衛門は観世座付、忠次郎は笹井姓で金春座付、森田庄兵衛は観世座付。六郎左衛門は一噌六郎左衛門で後の宗光。小鼓の幸清六は金春座付、宝生新九郎はこの年観世座から宝生座に移籍させられ、姓も改めさせられた。権九郎はその新九郎の子息で、父と同じく宝生座付。長右衛門は大倉姓で金春座付、新右衛門は中桐姓で大倉の弟子である。大鼓の葛野九郎次郎・同一郎兵衛（市郎兵衛とも）は観世座付、金春三郎右衛門は金春座付で加賀藩からも扶持をもらっている。助右衛門は清水助右衛門で、観世座付と思われる。

太鼓の観世左吉は観世座付、又次郎は金春姓で金春座付である。大鼓の三太郎、太鼓の三九郎については今後の考証を俟ちたい。後見は宝生九郎友春と金春八郎元信である。間狂言は大蔵と鷺仁右衛門らが勤めた。鷺仁右衛門は観世座付、大蔵は金春座付である。原本の「大蔵」の下に約二文字ほどの空白があるのは、葛巻が後で名前を書き入れようと思っていたのがそのままになったと推測し、翻刻でも空欄にしている。番組に狂言の曲名が見られないのは、管見に入った他の記録でも同様である。当該の催しが、大名に能を舞わせることが主眼であったため、狂言は演じられなかったのであろう。

当初能十三番を予定しており、最後の〈乱〉は南部信濃守が勤めるはずだったが、日が暮れたため、謡だけとなった。一日の番組としてはかなり番数が多い。仮に日暮れ時を午後六時頃と設定すると、午前八時から始まり、約十時間かかったことになる。中入の饗応を

十日。天快晴。為昨日之御礼御登城也。五時御出被遊、從御城御老中方并備後守殿江被為御座。其より紀伊守様江御見舞

被遊、八半過 御帰館也。暫有て内記様御見舞。則於大書院御對面。是昨日之御祝詞旁御出也。

今昼津田玄蕃孟昭到着。今夜表御居間御出座之内、前田佐渡披露にて御目見之處、〔四字分空白〕且又昨日之御仕合被 仰出。此旨以御書可被 仰下被 思召候處、參着仕之由、御意有之云々。

今夜御細工者之内、加藤市丞・同勘左衛門・同惣大夫・桐之間迄被 召出。惣大夫持參仕小鼓 御前江被召之、御試ニ御しらべ被遊也。〔以下五行半に渡り墨藏〕右御鼓被遊以前、多賀新左衛門被召之、被 仰出趣有之。是左ニ記御鼓被遊事歟。右之刻、御姫様御出被遊、則於桐之間、東北・ばせをノくせ斗惣大夫へ

鼓被 仰付、市丞独吟ニて謡之。勘左衛門手拍子也。其後從御前勸進帳打可申旨被 仰出、市丞・勘左衛門謡之、惣大夫打之。(今夜四比御屋敷退出而、往中原直方旅亭。明遠・克明等同来会。)

前日九日の大名衆の御能へ招待された御礼を述べるに、綱紀は江戸城へ登城する。老中と側用人牧野備後守成貞のところへも挨拶に行き、その後浅野紀伊守光晟のところも訪問してから藩邸に帰館した。夜は御細工人の加藤市丞、加藤勘左衛門、加藤惣大夫を桐の間に召し出している。この三人は兄弟で、前田家の御能の際には、玄人の能役者に交じって、大鼓・小鼓を勤めており、江戸・金沢両方の演能記録に名前が見える。惣大夫が持参した小鼓で、綱紀が試しに

調べを打った。綱紀が鼓を打つ前に多賀新左衛門が呼ばれ、通達が

あったようだが、その詳細は十月十四日条に詳しい。後から姫君がお出ましになり、《東北・芭蕉》のクセを演奏させた。謡は市丞の独吟、惣大夫は小鼓を打ったが、勘左衛門は大鼓を持参していなかったのか、手拍子を打った。次に《勧進帳》（《安宅》の一部分）を打つよう仰せがあり、市丞と勘左衛門が謡い、惣大夫が鼓を打った。《勧進帳》は、現在でも一調という、鼓と謡だけで演奏する形式がある。綱紀が自ら楽器を手にした記録は、当日記では初めてである。『加賀藩御細工所の研究（二）』（金沢美術工芸大学・美術工芸研究所、一九九三年）にも、当該記事が引用されている。

【貞享二年十月十四日】

十四日 天陰。夜_ニ入、月清光。又時雨。又晴テ月清。（中略）

昨夜加藤市丞・同惣大夫奥御居間_江被 召出、御鼓被遊云々。

二三日已前、有賀・稲垣より於御屋敷以紙面言達之。其覚書之趣ハ九日_ニ於 御城御老中方御挨拶_ニ、なり物等何も不被遊候哉と被仰_ニ付、曾而御不調法御座候由被仰達候、然ドモ重而何とぞ被 仰出儀も可有御座候哉、廿ヶ年斗已前、御鼓被遊候故、為御試御鼓被遊、重而御尋之時分、音も出申とか、或何とぞ御挨拶ノ為 御ならし被遊候。曾而御稽古と申ニてハ無之候間、御屋敷中之儀者沙汰仕候ても不苦候、外へハ沙汰不仕候様_ニ諸頭・諸才許中江可申聞旨、多賀新左衛門を以被 仰出之由也。

前日の十月十三日の夜、御細工人の加藤市丞と加藤惣大夫が召し出され、十日に続き綱紀が鼓を打ったことが記される。それまでは能を鑑賞するのみであった綱紀が、急に鼓を手にとったのは、理由

があった。十四日条の二、三日前、有賀甚六郎と稲垣三郎兵衛から、家臣たちに紙面で通達があり、その内容が記されている。十日条に見える「右御鼓被遊以前、多賀新左衛門被召之、被 仰出趣有之。是左_ニ記御鼓被遊事歟」とも関わっている。九日に江戸城での能のため登城した際、老中との挨拶の場で、鳴物（能の楽器）は何もできないのか、と尋ねられ、すべて不調法であると綱紀は返答した。しかし、再度幕府から同様の質問がある可能性を見越し、約二十年前に鼓をやっていたので、今回試しに打ってみた。ただし、あくまで実験的なもので、稽古というほどのものではない。従って、屋敷内では構わないが、屋敷の外で主君が鼓を打っていることを口外しないようにと、家臣達へ言い含めた。噂が広まらないように細心の配慮を払ったのであろう。前条に続き、この記事も『加賀藩御細工所の研究（二）』に引かれている。

【貞享二年十月十六日】

十六日 天陰。折々小雨降。紀伊守様より御使者を以被仰達

ハ、来廿六日七日之内、御能御興行可被成候。青山之御屋敷_ニハ舞台有之候、赤坂御屋敷_ニハ御座敷舞台にて候。青山迄ハ遠方_ニ候間、御勝手次第いづかたへ成とも御出可被遊之旨被仰達由也。則御返答_ニ、両御屋敷之内、何方_ニても御能御興行被成候、御勝手_ニ宜方_ニて御興行可被成候。御日限之儀、両日共_ニ御隙_ニ御座候。但小笠原遠江守殿并内記様_江茂可被仰達候之由云々。御使者取次平岡五左衛門也。

紀伊守様より重而御使者来。廿六日青山之御屋敷にて御興行可被成之由也。有賀甚六郎取次也。則御返答、甚六郎被 召出へ、

被 仰合也。あなたよりノ御使者号宇賀平内。今朝も此者也。

依之、遠方両度迄大儀思召、御酒^ニても給候様^ニと申聞、御菓子等可出之由被 仰出、及其儀云々。

内記様 江御使者を以廿六日之儀被 仰遣候処、則御越可被成之旨御即答云々。右御能之儀、重而御見物被成度旨、昨日被 仰之故也云々。(後略)

浅野紀伊守光晟からの使者が来て、二十六日もしくは二十七日に能を興行したいとの知らせである。広島藩江戸藩邸は、青山の下屋敷に本舞台、赤坂の中屋敷に座敷舞台を所有していた。青山では遠いので、お好きな方どちらでもよいのでは非おいでいただきたい、とのことであった。前田家の本郷上屋敷、駒込中屋敷ともに、赤坂よりは青山のほうが少し離れているのを氣遣っているのであらうか。綱紀は赤坂の屋敷をよく訪問している。綱紀はすぐに返答した。場所・日時ともにどちらでも構わないので、浅野家の都合のいい方で開催してほしい旨、ただし、小笠原遠江守(豊前小倉藩主小笠原忠雄)、内記こと前田利直(大聖寺藩前田利明嫡子)にも使いを出すとのことであった。浅野家藩邸から折り返し使者が前田家を再訪した。二十六日に青山の下屋敷で行われることが決定したことが伝えられた。浅野家と前田家を一日に二往復することになった、浅野家からの使者宇賀平内には、綱紀の意向で酒や菓子が振る舞われた。分家の大聖寺藩の跡継ぎである前田内記利直に、二十六日の能の件で使者を遣わすと、即答で浅野家の招請に応じることとであった。実はこの話は前日からの約束だったらしい。

前日条の十月十五日条に、浅野光晟が前田家の上屋敷を訪れてい

る記事がある。綱紀と雑談し、会食している。その際、他にも客衆がおり、先の二人も同席していた可能性も十分にあるう。

【貞享二年十月十七日】

十七日 天晴。今朝小笠原遠江守殿^江御書を以廿六日之儀被 仰遣云々。遠江守殿廿六日七日共^ニ難義御隙入候条、廿五日^ニ御越被成間敷哉之旨被仰越之由云々。

浅野家での能の催しの日程調整の記事。前日条では十月二十六日・二十七日のいずれかで調整しており、一旦は二十六日に決定していたが、小笠原遠江守に書状を送ったところ、両日ともに都合が悪く、二十五日ではだめかと連絡があったとのことである。小笠原遠江守は小倉藩主の小笠原忠雄で、浅野光晟の女婿にあたる。

【貞享二年十月十九日】

十九日 天晴。紀伊守様より御使者。来廿五日弥御出可被成候旨、然者御慰^ニ山田一之進^ニも御能可被仰付候。依之、番付御書記被遣之。頼政・八嶋此内一番、船橋・富士太鼓・春日龍神・融・山姥此内二番、御好可被成旨也。御返答^ニ重々被入御念儀被 思召候、然バ前二番之内^ニて頼政、末五番之内^ニては富士太鼓なども宜有御座候歟。今一番ハ其^ニていづれ成とも御好可被成候之旨被 仰遣也。

今夜御姫様御慰^ニ御囃子三四番有之、先東北一番ハ六過桐之間^ニて也。是畢而被爲入。又御出被遊、五時分采女・ばせを・放下僧也。笛ハ御徒山東作左衛門、大鼓ハ加藤市丞、勘左衛門替候。手拍子也。小鼓ハ加藤惣大夫也。謡も是等内、扱ハ齊藤善助など也。以後ノ三番ノ時ハ表御居間 御出座^ニ付、奥御廊下

へ候て有之也。

前半は浅野家で行われる能についての連絡の記事。浅野光晟からの使者が来訪し、前出の十七日条の通り、小笠原遠江守の都合も勘案し、二十五日に決まったとのことである。加えて「山田一之進」にも能を仰せつけたとある。この「山田一之進」なる人物は、恐らく喜多流能役者「山田市之丞」のことであろう。筆者の葛巻昌興はもともと「丞」の字に癖があるが、当該箇所は明らかに「進」なので、そのまま翻字した。能役者「山田市之丞」は、甲府藩徳川綱豊（のちの家宣）のお抱え役者であったが、綱豊が將軍継嗣となり、甲府藩廃止の後には江戸城に入り、お部屋役者として活躍した。正徳頃から江戸城での演能記録にその名が見える。この人物については、表章『喜多流の成立と展開』に詳しい。浅野家のお抱え役者も喜多流であるため、山田とも縁があったのであろう。その山田に舞わせる能について、綱紀の好みを聞くため、光晟は番付を送ってよこしたのである。〈頼政・八嶋〉からいづれか一番、〈船橋・富士太鼓・春日龍神・融・山姥〉の中から二番選ぶようにとの知らせに、綱紀は〈頼政〉と〈富士太鼓〉を選び、あとはどれでもよいと返答した。後半は前田家江戸藩邸での囃子の記事。御姫様の慰みで、〈東北・采女・芭蕉・放下僧〉が囃された。綱紀は〈東北〉終了後に一度は退出したが、再度出てきて囃子を聞いた。笛は御徒の山東作左衛門、大鼓は御細工人の加藤市丞と加藤勘左衛門が交替で手拍子を打ち、小鼓は同じく御細工人加藤惣大夫が勤めた。謡は以上四名の内いづれかもしくは家臣の斎藤善助らが謡ったとある。内々の催しで幼い姫君に聞かせるためか、玄人の能役者は呼ばず、家臣だけで済ま

せたのであろう。大鼓を手拍子で囃すのも略式であったためであろう。「御姫様」というのは、後に浅野吉長に嫁ぐ節姫のことと思われる。

【貞享二年十月二十一日】

廿一日 天晴。今日木貞幹御招之、於表御居間易経講談^{序一篇}被聞召之。是ハ兼之所被 仰入也。先多賀新左衛門直方誘引^ニテ、御目見。依仰、一ノ間御闕之内江被參進云々。前田佐渡孝貞・津田玄蕃孟昭・奥村兵部惠輝・多賀新左衛門直方并平岡五左衛門親仍・津田伊織盛昭等二ノ間、藤田平兵衛・有賀甚六郎者桐之間祇候。各麻上下着之。聴聞之講談畢而御熨斗鮑^ニ三方ニ載之。高田久兵衛持參之。着麻上下。御手自被下之。御挨拶之上、木貞幹被退去。且於小書院御饗膳。後藤理兵衛光邦相伴タリ。御銚子出、為御使有賀宗治を以、今日始而易講談首尾好被 聞召候条被賀之。御酒給可被申之旨被 仰遣之。講談ニ付、被召麻御上下也。

木貞幹こと木下順庵を招請し、易経の講義を聞く。六月十一日条で一度は予定していたものの、延期となったのが、四ヶ月後によく実現した。「於表御居間易経講談」の下割注は、後年料紙が切断されたようで、左側下の一字が欠けて見えなくなっている。写真では、「二」の下に「篇」の字が部分的には見えているので、「序／一篇」とした。初めての易経の講義であるので、恐らく冒頭部分を読んだのであろう。初の講義終了後、講師を勤めた学者に、熨斗鮑を綱紀自ら下賜するのは、八月十一日条の日本紀講義の際の田中一閑に対してと同様である。その後、貞幹には小書院で饗応の膳が

ふるまわれ、酒も出された。この日、講義があるからと主君も家臣も揃って麻上下を着ている。なお十二月十一日条参照。

【貞享二年十月二十二日】

廿二日 天陰。今朝牧野備後守殿^江被成御座、其より戸田山城守殿^江被成御座、其より御上屋鋪^江被為入。九半時過御帰館。於備後守殿御養子美濃守殿ハ初而 御対顔。仍以御使札御肴一種被遣之。御使進藤六左衛門也（御使番）。七半時過山東作左衛門・加藤市丞兄弟三人、御次御縁通^江被召出、ねとりの笛・をき鼓など被 聞召。其後於桐之間江口・楊貴妃等くせより御囃子有之。但是ハ御姫様御出被遊、御姫様御慰也。謡ハ生駒右近并加藤市丞斗也。大鼓ハ加藤勘左衛門手拍子也。今日御上屋鋪大御門建初之。柱建不及御儀式。

家臣に部分演奏の居囃子をさせた記事。御徒の山東作左衛門、御細工人の加藤三兄弟（市丞・惣大夫・勘左衛門）を召し出し、音取の笛や置き鼓などをさせ、それを聞いた。その後は姫君（節姫であろう）がお出ましになり、〈江口〉や〈楊貴妃〉のクセ以降を同じく居囃子の形式で演奏した。前出の十月十日条・十九日条も同様だが、姫君の前で演奏する曲は三番目物が多い。謡は加藤市丞のほかに、家臣の生駒右近が謡った。十月十日条・十九日条と同様、加藤勘左衛門は大鼓を手拍子で打っている。

【貞享二年十月二十四日】

廿四日 天晴。今日已刻出仕、及戌下刻帰宅。依兼約請案内、招直清、子罕篇習之。源惟明同ク来り。

直清による論語講釈の記事。この日は第九子罕篇の講義であった。

最初の講義がいつだったのか、当日記の記述には見えないが、前出の九月二十九日条、十月七日条に続き、最初から順番に読み進めているようである。源惟明は、鳩巢の弟子青地礼幹の随筆『可観小説』卷三十七、元禄三年四月十七日条に「一、源惟明へ返書の序に／十七日源惟明より書信あり、辺書の序に書付。／いとひても猶いとはしき世の中を思ひ顔にも過る頃かな／過しつる此年月もはかなければか斗りならむ世とは思はで」とその名が見える。同じく儒学者の一人であろう。

【貞享二年十月二十五日】

廿五日 天快晴風無。兼々御約束之通、紀伊守様御下屋敷^江被成御座。是御能御興行ニ付而也。御出寅中刻、御帰館酉中刻斗也。今晚御出之刻、御途中より内記様御同道之由。

今日御相伴、内記様・小笠原遠江守殿・本多能登守殿・三好丹波守殿・前田相模守殿・横山内記殿等御越之由也。

御能者

和布苅 喜多権左衛門

頼政 山田一之進

井筒 紀伊守様

富士太鼓 山田一之進

源氏供養 紀伊守様

桜川 紀伊守様

海士 三好丹波守

春日龍神 山田一之進

熊坂 山田一之進

鷹ぬす人

はな折

犬山伏

今昼依閑暇招克明重幸等及閑談。酉中刻 御帰館ニ付予出仕。

亥刻帰宅往克明宅。

広島藩浅野家江戸藩邸での能の記事。十六日条以降の記事で日時や番組について調整してきた、浅野家青山下屋敷での能興行である。約束通り、綱紀は本舞台のある青山下屋敷へ向かう。その途中で大

聖寺藩の前田内記利直を同道し、一緒に青山まで行った。大聖寺藩は下屋敷が駒込にあり、加賀藩中屋敷と程近い。綱紀・利直のほかに招請された客は、前出の小笠原遠江守忠雄、本多能登守忠平（大和郡山藩）、三好丹波守政盛、前田相模守孝矩、横山内記知清（以上旗本）らである。

番組は能九番、狂言三番。そのうち〈和布刈〉のシテを勤めた喜多権左衛門は喜多座のツレ役者で、北七大夫の息子である。もとは津輕藩のお抱えであったが、寛文十三年（一六七三）から広島藩のお抱えとなった（表章『喜多流の成立と展開』。シテを勤めたのが一番のみであるのは、以下の番組で地頭や後見を勤めるためであろう。十月十九日条に既出の「山田一之進」こと「山田市之丞」は綱紀が選んだ〈頼政・富士太鼓〉のほか、〈春日龍神・熊坂〉の計四番のシテを勤めている。十月九日条の江戸城での大名衆による能にも出演した浅野紀伊守光晟は〈井筒・源氏供養・桜川〉の三番を舞う。〈海士〉のシテ三好丹波守は三好政盛で、禄二千石の旗本で奥小姓等を勤めた人物（『寛政重修諸家譜』）である。大倉三忠氏蔵『尾張能番組』によると、三好は元禄三年五月四日に尾張藩邸で催された松平紀伊守殿御招請御囃子において〈羽衣〉の舞囃子を舞っており、やはり浅野光晟の前で能を披露している。

【貞享二年十月二十六日】

廿六日 天陰。今晚寅下刻以後地震及三度、夜明テ以後又動。（中略）

為昨日御礼、今早朝紀伊守様江奥村兵部為御使者被遣之。

前日の浅野家での能の催しの招待に対し、御礼として奥村兵部恵

輝を使いとして遣わした記事。能楽とは関係しないが、冒頭以下には早朝に起こった地震と、その見舞に関する記事がある。

【貞享二年十月二十七日】

廿七日 天快晴風無。午刻已前御上屋鋪江被成御座。是上使可有之哉之旨ニ付而也。未刻比為 上使村上三右衛門殿御出。御鷹之鶴御拝領之。

則為御礼御登城。七半時過御帰館。御老中方へハ御使被遣之。今夜夢想ニ得一句。

春霞としの内より立初て

今日、戸田山城守殿江御老中方御招請能御興行之由。依之、今朝茂御使者被遣之。重而以御使者檜御重一組御進贈也。

前半は幕府からの上使が藩邸に来訪した記事。貞享二年当時、前田家の本郷の上屋敷は建て替えて作事中のため、綱紀は中屋敷にすることが常である。ただし上使や来客の場合は上屋敷へ赴く。二十七日以前に、上使が来るかもしれないからと綱紀が上屋敷へ向かうが、結局上使は来ず、中屋敷に帰ることになることが度々あり、その度に葛巻ら家臣達も屋敷間を往復していた。上使は將軍綱吉からの御鷹の鶴を届けに来たのであり、綱紀はこれを拝領した。翌月の十一月には、当該条で拝領した御鷹の鶴を披露する催しがあり、そこで能も行われている。詳しくは十一月十五日条を参看されたい。

葛巻本人が詠じた句を挿み、末尾には老中戸田山城守忠昌の屋敷で老中招請能が行われた記事が見える。綱紀は使者と檜重を贈った。戸田忠昌は天和元年から老中の職にあり、下総国佐倉藩主である。『柳営日次記』同日条には、「一、戸田山城守宅江老中招請能興行、

御繪拝領祝儀也」と見える。

【貞享二年十月二十九日】

廿九日。天快晴風無^シ。今夜招直清、郷党之篇習之。於茲上論了。

論語の講義の記事。直清（室鳩巢）を招き、論語の第十郷党篇を習ったとある。論語は全二十篇から成り、第一から第十を上論、第十一から第二十を下論と称すこともある。したがって第十郷党篇は上論の末尾に相当する。九月下旬頃から読み進め、当該条でちょうど半分を終えたことになる。

【貞享二年十一月一日】

一日 天快晴無風。（中略）今日謝松風亭記述作和歌三首^{加序}、直清^江遣之。露命難待ニ付、先不顧疎筆、草稿之体ニて遣之也。追而得写暇^バ、可進清書由、申送也。（下略）

前月二十八日条に「丹直清述作松風亭記一卷而授贈之。尤不堪為家珍重也」とあり、直清授贈の『松風亭記』の返礼として和歌三首に序を加え、遣わしたとの記事。草稿の状態であるものをとりあえず送ったとある。十月九日条の末尾記事参照。

【貞享二年十一月二日】

二日 天陰。（中略）来九日、肥後守様・内記様御招請之旨、是御拝領鶴御披云々。

九日の保科正容と前田利直の招請饗応のこと。十月二十七日条にある拝領の鶴を宴席で披露するのが目的である。

【貞享二年十一月八日】

八日 天晴。（中略）明日、肥後守様御招請之事、肥後守様御

隙入有之旨御断ニ付、御延引之由也。

九日に予定されていた保科正容の招請饗応が、正容の多忙につき延引となった記事。

【貞享二年十一月十一日】

十一日 天晴。今夕從 公館退出、直於外馬場乗車。今夜、招直清、先進之篇習之。

室鳩巢を招き、先月に引き続き『論語』を講読。上論はすでに読み終えて、下論のはじめ「先進」を習った。

【貞享二年十一月十四日】

十四日 雨降。今朝初雪聊降之由。

明日、肥後守様御招請也。仍大書院之御鋸仕置之由、玄蕃・兵部言上之。未后刻 御出。御覽被遊御棚之御鋸等、少々御好有之。件之兩人伺候。表御居間御床之御鋸^{予奉}仰、使御茶堂竹中是三、於御懸物掛之、御卓・香炉等置合之。御懸物ハ雪窓之蘭也（南堂ノ賛有之極物也）。御香炉ハ、カラカネノ真向ノ獅子也。御卓ハ青貝也。右御懸物於此御床者、不取合之由、再三 御意也。然共、折節外ニ相叶 御意者、無之ニよて、先可為此分旨、被 仰出也。則其旨、玄蕃・兵部へ相伝之。

多賀新左衛門忌御免除、今夜出仕云々。

日延べになっていた保科正容招請を明日に控えて、その準備についての記事。綱紀は各座敷の床飾りにも余念がなく、昌興も君命で竹中は三に使した。掛物は雪窓の蘭。雪窓とは明雪窓で、趙子昂に学んだ元の僧。『君台観左右帳記』に名が見える人物である。賛を記した南堂とは、了庵清欲で元の禅僧であり書家。日本へ伝わった

書の多くは、茶掛として珍重されている（『原色茶道大辞典』淡交社）。この掛物と床との取り合わせが悪いと再三の指図があったが、結局ほかに相応しい掛物がないため、この掛物に落ち着いた経緯が記されている。

【貞享二年十一月十五日】

十五日 天快晴。已刻以後発寒風。御登 城如例。四半時過、御帰館。

今日肥後守様御招請也。未刻御出也。□^(宮)之辺 江御出向、即大

書院江御誘引也。御相伴ハ、松平筑後守殿・保科主税殿・柴田七左衛門殿・松平左門殿也。御勝手ハ、内記様・前田宮内殿・同相模守殿・横山内記殿・同左門殿・本多弥兵衛殿等也。肥後守様御着座。先、御熨斗鮑御三方出ル。押付、御料理出ル。肥後守様へ御焼物、御自身御持出被遊、且又、御重引御相伴共々被遊也。御吸物出、御土器出、御出座。御献酬有之。此間、御囃子三番有之也。前田佐渡孝貞、津田玄蕃孟昭、奥村兵部惠輝、多賀新左衛門直方へ、肥後守様御土器被下也。此間者、御勝手ニ被成御座、重而御出座、御土器御収被遊也。

内記様ハ於表御居間、御料理出ル。前田宮内殿・横山内記殿、御相伴也。

今日、大書院御床、雪舟三幅対、中尊観音、左右竹ニ雀ト、竹ニ芙蓉也。立花、二瓶御附。書院ニ御硯、硯屏等御置合有之。押入御床、御香炉・御食籠等也。

表御居間ハ雪窓ノ蘭（蘭ノ賛ハ南堂也）、御懸物。御卓ニ獅子御香炉也。

荒石ヲ自礪^ツ、何^カ 小竹紛^{トシテ} 交^リ 加ス 九^ニ 晩千^リ
古ノ憶^コ 一^ニ 叢三四^ニ 花 了菴更

御囃子

保生九郎 大 今春三郎右衛門 笛 一曾六郎左衛門
老松 小 幸 清六 太 観世 左 吉

同 江 口 葛野一郎兵衛 保生 新九郎 森田庄兵衛

同 祝 言猩々 加藤 市丞 一曾六郎左衛門
同 惣大夫 藤本太左衛門

今日、諸士各熨斗目小袖着之。

松平筑後守殿ハ信州飯山ノ城主、遠江守殿之御嫡子也。遠江守殿ハ前々より被 仰通之処、筑後守殿ハ未御通路無之、今般初而被 仰遣也。但先肥後守様より御誘引被成候様ニ被 仰達、其上ニて御使者被 仰入也。

今日 御土器

今日肥後守様・内記様御供中侍分并御徒迄ハ御料理、其より以下ハ御菓子御酒等被下之也。吉田左大夫・土方勘解由・伴源兵衛、且又、御徒小頭、酒井勘七・大村伊左衛門等、其事を奉仕云々。

奥村兵部儀、同性又十郎死去之旨、金沢より申来ニ付、今夜不遂出仕云々。

保科正容の招請饗応についての記事。場所については空白のため未詳であるが、綱紀が出向き正容を大書院へ迎え入れていることや、焼き物を自ら進めていることからみて、手厚く歓待する様子が窺え

る。大書院の床飾りの掛物は雪舟の三幅対。表御居間には昨日から変更なく雪窓の蘭が掛けられ、本条には了庵清欲の賛の文言が引用されている。

能は〈老松・江口・狸々〉の三番が催され、シテはいずれも宝生九郎友春である。笛方は、一噌六郎左衛門・森田庄兵衛。小鼓方は幸清六・貞享元年に改名を命じられ宝生姓となった新九郎豊重・加藤惣大夫（金沢）。大鼓は金春三郎右衛門・葛野一郎兵衛・加藤市丞（金沢）。太鼓は観世左吉。

また、保科正容の誘引により、松平忠継が今回はじめて綱紀に謁見したことが知られる。

【貞享二年十一月十七日】

十七日 天陰。夜ニ入、雨降。今夕 御姫様御慰のため御囃子三番有之。杜若、小塩、三輪也。尤御手役者斗也。但大鼓ハ手拍子也。昨日金沢より到来之御小鼓^{幸小左衛門宗能}判形有之^之〔先比取ニ被遣也。諸宮方支配之物也〕今日、予奉之而加藤惣大夫江被預下之也。

節姫の御慰のため〈杜若・小塩・三輪〉の三番の囃子が奏された記事。金沢の役者によるもので、大鼓は手拍子であった。また、昨日、金沢から幸流五世小左衛門宗能の花押のある小鼓が届き、葛巻から加藤惣大夫へ預け下されたことも記されている。

【貞享二年十二月十一日】

十一日 天快晴無風。今日雖入寒、不似寒氣水不氷。
今日木下順庵参上。易講談^{次之序也}、於表御居間也。被召麻上下、如先日、表御居間一之間西之御縁之方^ニ 御着座、被掛

易於御見台也。順庵者同東之御縁御障子之際^ニ 伺公、被向見台也。二之間ニハ佐渡・兵部・新左衛門、其外有合之頭分之輩^{各着麻下} 伺公、拝聴。玄蕃ハ頃日依病氣、無出仕也。講談九半前より初、八時過終。其以後順庵於小書院御饗膳云々〔予当番ニて勤仕於桐間拝聴之〕。（下略）

十月二十一日に続く、木下順庵による易の講談の第二回である。詳しくは同日条を参照。

【貞享二年十二月十六日】

十六日 天晴風聊吹。（中略）竹田平四郎儀、御用有之条、来正月廿日已前、装束等為持可罷下旨今日被 仰出也。（下略）
御家役者竹田平四郎を江戸に呼び下すことを命じた記事。翌年正月十九日に下着し、二十日に挨拶に参上した由が見える。

【貞享二年十二月廿九日】

廿九日 天陰無風。（前略）九半時過表御居間御出座也。去廿日御不快^ニ被成御座、其より至今日迄、表江御出座無之云々。而昨日田中一閑せがれ平之丞、大地故甫齋^{御茶堂}せがれ彦右衛門儀被 召出組外組云々。仰付今昼 御目見被 仰付也。献鳥目百疋。取次番富田治部左衛門披露之。彦右衛門儀、家業不得相勤之処、亡父甫齋久々於御近習律儀^ニ相勤候^ニ付、被 召出之由、被 仰出云々。（中略）
林春常老之息又三郎殿、痘瘡^ニ而昨日死去也。依之、今日春常江白銀十枚被遣之。御口上者、又三郎殿御死去^ニ付、白銀目錄之通御進贈之旨也。是尋常之御香奠也。尤於儒家者其喪之主迄贈物たるの由被 仰出也。（下略）

国学者で神道家の田中一閑・大地甫斎の嫡子を外組に召し抱える
記事と、幕府儒官林春常信篤子息又三郎死去の弔問のこと。また儒
者への弔問故実。なお林春常はこの月二十五日に二百石の加増（計
千三百石）を賜ったばかりで慶弔相交わる。